

昭和文学全集



3

志賀直哉

武者小路実篤

里見弴

宇野浩二

昭和文学全集

第3巻

昭和六四年一月一日 初版第一刷発行

著者——志賀直哉 武者小路実篤 里見淳 宇野浩二

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇〇 東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号

振替 東京八一〇〇番

電話 編集・〇三一一三三〇—五二二六

業務・〇三一一三三〇—五二二三

販売・〇三一一三三〇—五七二九

印刷——凸版印刷株式会社

製本——凸版印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN 4-09-568003-2

©NAOKICHI SHIGA MUSHAKOJI SANEATSUKAI
SHIZUO YAMANOUCHI MORIMICHI UNO 1989

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

志賀直哉

5

7
暗夜行路

206
山形

211
沓掛にて——芥川君のこと——

216
豊年虫

221
万暦赤絵

227
日曜日

231
孤野

238
馬と木賊

239
淋しき生涯

252
灰色の月

254
兔

256
蝕まれた友情

275
奇人脱哉

280
末っ児

284
山鳩

286
朝の試写会

292
自転車

298
朝顔

300
白い線

304
盲亀浮木

313
泉鏡花の憶い出

316
内村鑑三先生の憶い出

324
ヴィーナスの割目

326
雀の話

328
老廃の身

330
創作余談

336	続創作余談
345	続々創作余談
武者小路実篤	351
353	井原西鶴
385	愛と死
426	真理先生
527	馬鹿一
534	玄妙
538	泰山の結婚
547	空想先生
553	牟礼随筆 より

里見弴	563
565	双女四景
575	無免許灸
587	姥捨
611	みごとな醜聞
621	いろいろとこ
626	初舞台
636	骨
644	恋ごころ
657	彼岸花
678	極楽とんぼ
738	五代の民
747	新派と私
757	私の一日

767 枯木のある風景

781 枯野の夢

818 子の来歴

836 器用貧乏

878 思い川―あるいは夢みるような恋―

957 うつりかわり

992 芥川龍之介―思い出すままに―十二章～十五章

1021 作家アルバム

解説

1029 志賀直哉……高橋英夫

1036 武者小路実篤……紅野敏郎

1043 里見弴……E・G・サイデンステッカー

1050 宇野浩二……野山嘉正

年譜

1057 志賀直哉……紅野敏郎

1063 武者小路実篤……紅野敏郎

1069 里見弴……紅野敏郎

1075 宇野浩二……澁川驍

1080 底本について

1081 用字用語について

志賀直哉



暗夜行路

武者小路実篤兄に捧ぐ

序詞（主人公の追憶）

私が自分に祖父のある事を知ったのは、私の母が産後の病気で死に、その後二月程経って、不意に祖父が私の前に現われて来た、その時であった。私の六歳の時であった。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでいると、見知らぬ老人が其処へ来て立った。眼の落ち窪んだ、猫背の何となく見すばらしい老人だった。私は何という事なくそれに反感を持った。

老人は笑顔を作って何か私に話しかけようとした。然し私は一種の悪意から、それをはぐらかして下を向いて了った。釣上った口元、それを囲んだ深い皺、変に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でそう思いなが

ら、尚意固地に下を向いていた。

然し老人は中々その場を立去ろうとはしなかった。私は妙に居堪らない気持ちになって来た。私は不意に立上って門内へ駆け込んだ。

其時、

「オイオイお前は謙作かネ」と老人が背後から云った。

私はその言葉で突きのめされたように感じた。そして立止った。振返った私は心では用心していたが、首はいつか音なく黙頭いて了った。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振った。然し此うわ手な物言いが変に私を圧迫した。

老人は近寄って来て、私の頭へ手をやり、「大きくなった」と云った。

此老人が何者であるか、私には解らなかつ

た。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親である事を既に感じていた。私は息苦しくなつて来た。

老人は其儘帰って行つた。

二三日すると其老人は又やつて来た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると、何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になった。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其処には祖父の他にお栄という二十三四の女が居た。

私の周囲の空気は全く今までとは変つて居た。総てが貧乏臭く下品だった。

他の同胞が皆自家に残つて居るのに、自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼児から慣らされていた。今に始まつた事ではないだけ、何故かを他人に訊く気も私には起らなかった。然しこういう風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだろうと云う漠然とした予感が、私の気持を淋しくした。それに付いても私は二ヶ月前に死んだ母を憶い、悲しい気持ちになった。

父は私に積極的につらく当る事はなかつたが、常に常に冷たかつた。が、この事には私

は余りに慣らされていた。それが私にとって父子関係の経験としての全体だった。私は他の同胞の同じ経験をそれに比較するさえ知らなかった。それ故、私はその事をそう悲しくは感じなかった。

母は何方かと云えば私には邪慳だった。私は事々に叱られた。実際私はきかん坊で我儘でもあった。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるような事がよくあった。然し、それにもかかわらず、私は心から母を慕い愛していた。

四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だった。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いている隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあった梯子から誰にも気づかれずに一人、母屋の屋根へ登って行った事がある。棟伝いに鬼瓦の処まで行って馬乗りになると、変に快活な気分になって、私は大きな声で唱歌を唄って居た。私としてはこんな高い処へ登ったのは初めてだった。普段下からばかり見上げていた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えている。鳥が忙しく飛んでいる……

間もなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでいるのに気がついた。それは気味の悪い程優しい調

子だった。

「あのネ、其処にじっとして居るのよ。動くのじゃ、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其処に音なしにして居るのよ」

母の眼は少し釣上って見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りて了おうと思った。そして馬乗りの儘少し後じさった。

「ああっ！」母は恐怖から泣きそうな表情をした。「謙作は音なしのこと。お母さんの云う事をよくきくのネ」

私はじっと眼を放さずにいる、変に鋭い母の視線から縛られたようになって、身動きが出来なくなった。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して来た。後年もこれを憶う度、いつも私は涙を誘われた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はそう思う。

前後はわからない。が、其頃に違いない。

私は一人茶の間で寝ころんで居た。其処に父が帰って来た。父は黙って、袂から菓子紙包を出し、茶簞笥の上に置いて出て行っ

た。私は寝た儘、じろじろそれを見ていた。

父が又入って来た。そして、今度は紙包を戸棚の奥へ仕舞い込んで、出て行った。

私はむっとした。気分が急に暗くなった。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持って、次の間へ入って来た。私には我儘な気が無闇と込み上げて来た。泣きたいような、怒りたいような気持だった。

「母さん、お菓子」

「何を云うんです」母は言下に叱った。その少し前に私は其日のおやつを貰っていたのだ。

「何か。よう、何か」

母は応じなかった。そして、畳んだ着物を簞笥へ仕舞って出て行こうとした。

私は起き上って、

「よう、何か」こういって、母の前へ立ちふさがった。母は黙って私の頬をぐいとつねった。私は怒って其手をピシヤリと打った。

「もう食べたじゃ、ありませんか。何です」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて帰った菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は権利をでも主張するように頑固に首を振った。何しろ、私は気持がクシャクシャしてかなわなかった。其菓子がそれ程

に食いたいのではない。兎に角、思い切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうしても氣持が変えられなくなつて居た。

母は私の手を振り払つて、出て行こうとした。私は後ろから不意に母の帯へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に撞まった。其障子がはずれた。

母は本気で怒り出した。そして、私の手首を掴み、ぐんぐん戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱えて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食いしばっている味噌歯の間から、羊羹が細い棒になつて入つて来るのを感じながら、私は度胆を抜かれて、泣く事も出来なかつた。

亢奮から、母は急に泣出した。少時して私も烈しく泣出した。

根岸の家では総てが自堕落だった。祖父は朝起きると楊子をくわえて銭湯へ出かけた。そして帰ると其寝間着姿で朝餉の膳に向つた。

来る客も変わった色々な種類の人間が来た。殊に花合戦をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて来た。大学生、それから古道具屋、それから小説家(？)、それから山上

さんと皆が云っている五十余の一才未亡人らしい女などであつた。此女は其頃の医者が持つたような小さい黒革の手さげ鞆を持って来た。それには、きまつて沢山な小銭と、一揃

いの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入つて居たそうである。然し此女は未亡人ではなく、其頃大学で歴史を教えて居た或る年寄つた教授の細君で、此女の甥が嘗てお栄と同棲して居た、その縁故で、良人に隠れて好きな遊び事の爲めに来たのだと云うことである。其甥と云う男は大酒飲みで、葉巻のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、とうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺してつたと云う事を私は二十年程してお栄から聞いた。

山上と云う女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪弁ばかり使う若い寄席芸人がよく仲間へ入りに来た。

お栄は勝負には入らなかつたが、祖父の勝敗には多分實際上の氣持から、よく焦慮して口出しをして居た。そう云う時、いつも下品な皮肉を云つて皆を笑わせるのは其寄席芸人であつた。

後年私は、何故それ程、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたろうと、よく考へた。月々困らぬだけの金は父から来ていたのである。それなのに、祖父はがらくた道具

の売り買いをしたり、がらくた道具屋の競売に家を貸して席料を取つたりした。もうけずく以上、祖父の趣味のようにも思へた。

お栄は普段少しも美しい女ではなかつた。

然し湯上りに濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。そう云う時、お栄は妙に浮き浮きとする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行歌を小声で唄つたりした。そして、酔うと不意に私を膝へ抱き上げて、力のある太い腕で、じつと抱き締めたりする事があつた。私は苦しいまに、何かしら氣の遠くなるような快感を感じた。

私は祖父を仕舞いまで好きになれなかつた。寧ろ嫌いになつた。然しお栄は段々に好きになつて行つた。

根岸の家へ移つて半年余り経つた或る日曜日から祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云う未だ一年にならぬ赤児とそして父だけが家に居た。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつにない愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだった。何か其日氣分のいい事があつたのかも知れない。然しそんな事は

私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるような心持で、祖父が茶の間へ引きかえしてからも、一人其処に残っていた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとろうか」父は不意にこんな事を云い出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現わして喜んだに違いない。そして首肯した。

「さあ、来い」父は坐った儘、両手を出して、かまえた。

私は飛び起き様に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。

「中々強いぞ」と父は軽くそれを突返しながらか云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。

私はもう有頂天になつた。自身がどれ程強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云うより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突返される度に遮二無二ぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身体全体で嬉しがつた。そして、おどり上り、全身の力で立向かつた。然し父は中々私の為めに負けては呉れなかつた。

「これなら、どうだ」こういって父は力を入れて突返した。力一ぱいにぶつかつて行つた所にはずみ、食つて、私は仰向け様に引つかりかえつた。一寸息が止まる位背中を打つ

た。私は少しむぎになつた。而して起きかえると、尚勢込んで立向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感じられた。

「勝負はついたよ」父は亢奮した妙な笑声で云つた。

「未だだ」と私は云つた。

「よし。それなら降参と云うまでやるか」

「降参するものか」

間もなく私は父の膝の下に組敷かれて了つた。

「これでもか」父はおさえて居る手で私の身体をゆす振つた。私は黙つて居た。

「よし。それならこうしてやる」父は私の帯を解いて、私の両の手を後手に縛つて了つた。そしてその余つた端で両方の足首を縛合せて了つた。私は動けなくなつた。

「降参と云つたら解いてやる」

私は全く親みを失つた冷たい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帯びた一種殺氣立つた顔つきをして居た。そして父は私を其儘にして机の方に向いて了つた。

私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしている、父の幅広い肩が見るからに憎ましかつた。其内、それを見つめていた視線の焦点がぼやけて来ると、私はどうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく

泣き出した。

父は驚いて振り向いた。

「何だ、泣かなくてもいい。解いて下さいと云えばいいじゃないか。馬鹿な奴だ」

解かれても、未だ私は、なき止める事が出来なかつた。

「そんな事で泣く奴があるか。もうよしよし。彼方へ行つて何かお菓子でも貰え。さあ早く」こう云つて父は其処にころがつて居る私を立たせた。

私は余りに明らかな悪意を持った事が羞かしくなつた。然し何処かに未だ父を信じない氣持が私には残つて居た。

祖父と女中とが入つて来た。父は具合悪そうな笑いをしながら、説明した。祖父は誰よりも殊更に声高く笑い、そして私の頭を平手で軽く叩きながら「馬鹿だな」と云つた。

第一

一

時任謙作の阪口に対する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小説で到頭結論に達したと思つと、彼は腹立たしい中にも清々し

い氣持になった。そして彼は其読み終った雑誌を枕元へ置くのも穢らわしいような心持で、夜着の裾の方へ抛^なつて、電氣を消した。三時近かった。

彼は矢張り興奮して居た。頭も身体も芯は疲れていながら中々眠る事が出来なかつた。

彼は頭を転換さす為めに何か氣樂な読物を見ながら睡むくなるのを待とうと考えた。が、そう云う本は大概お米の部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ変だとも思い返して、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。襖の外で、

「一寸本を貰いに來ました」と声をかけて、「塚原ト伝は戸棚ですか」と云つた。

お米は枕元の電灯をつけた。

「床の間か、茶簞笥の上ですよ。未だ起きてたの？」

「眠れなくなつたんで、見ながら眠むるんです」

謙作は茶簞笥の上から小さい講談本を持つて、「明日」と云つて其の部屋を出た。

「御機嫌よう」こういつて、お米は謙作が襖を締めるのを待つて電灯を消した。

謙作は其氣樂な講談本を読みながら、朝露のような湿り氣を持った雀の快活な啼声を戸外に聴いた。

翌日はどんより曇つた静かな秋の日だ。午

過ぎて一時頃、彼はお米の声で眼を覺ました。

「竜岡さんと阪口さん」

彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に会うと云う事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこんぐらかつた問題であつた。

「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ」こう云つて出て行くのを、

「阪口だけ断つて下さい」と彼は云つた。

「何うして？」お米は驚いたように振り返り、両手を襖に掛けた儘、立つて居た。

「じゃあ、よろしい。二人共通して置いて下さい。直ぐ行きます」

謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小説と云うのは、或主人公が其家にいる十五六の女中と關係して、その女に出來た赤兒を墮胎する事を書いたものであつた。謙作はそれを多分事実だと思つた。そして其事実も彼には不愉快だったが、それをする主人公の氣持が如何にも不真面目なのに腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出来る場合は救せるが、阪口の場合は書く動機、態度、總てが謙作には如何にも不真面目に映つた。尚其上にそれに出て来る主人公の友達と云うのはどうしても自分をモデルにして居るとしか彼には考えられなかつた。其友達に対する主

人公の氣持が彼を怒らした。

主人公は其女が余りに子供らしく無邪氣な為めに誰からも疑われないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いじめたりする事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにいる友達がそれを切り心にで同情して居る。主人公は尚皮肉にそれを見抜きながら、多少苛々もして、其女を泣かす事などが書いてあつた。

謙作は其女中を実際嫌いではなかつた。如何にも無邪氣で人がよきそんな点を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居そうもない事は大概察して居た。それが阪口の小説では何も知らぬ友達が心密かに其女を恋しているように書いてあつた。そして主人公は腹に、動ともすると起つて来る嘲笑を抑え、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人の心を隅から隅まで見抜いたような、しかも、それが如何にも得意らしい主人公の氣持が謙作をむかむかせた。

然しそれにしても何故今日訪ねて來たか。其雑誌が出てからもう一週間になる。其間何か自分から烈しい抗議の手紙でも來そうに思いながら、中々來ない。其不安に却つて脅迫されて出て來たのではないかしら。それともっと性の悪い偽悪者根性から、太々しい

面構えを自分に見せるつもりで来たのかも知れないと謙作は疑った。若しかしたら手取り早く、面と向かつて思い切り云ってやってもいいと考えた。

謙作の考えは段々誇張されて行つた。彼は顔を洗ひながらこんな考えて興奮した。

茶の間で着物を着かえて居ると、座敷の方から二人のしている話し声が聴こえて来た。

二人は如何にも呑気な調子で話して居た。謙作は何だか自分だけが鯨張^{くじやう}つて居るような変な気がした。皆が平気で居る中に一人怒っている自分が狐につままれたように馬鹿気ても見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。

「昨晚はおそかったって？」彼が座敷へ入ると、竜岡が気の毒したと云う氣持を現わして云つた。

「もう起きる頃だったのだ」
阪口はお栄が出して置いた其日の新聞を見ながら何気ない顔をして居た。謙作は阪口が今自分が想像していたような氣持で来たのではない事を知った。例のだらしな、からずると竜岡に誘われて来たに違ひなかった。

それでも彼は、
「君達は何処で会つたんだ」と念の爲めに竜岡に訊いて見た。

「僕が連れ出したのさ」と竜岡は答えた。そして「此奴の今度の小説を見たかい？」と竜

岡は特に「此奴」と云う言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。

「いやな小説だ。それもいいが、中に出て来る氣の利かない友達をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすっかり腹を立てて、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやった所だ」

阪口は新聞から眼を放さず、にやにや笑つて居た。竜岡は一人云い続けた。

「大部分空想だと云うが、怪しいものだ。阪口のやりそうな事だ」

阪口はこんなに云われても別に不愉快な顔もしなかつた。彼の腹は解らなかつた。然し彼の行為の上の趣味から云つて、こんなに云われながら只にやにやしている事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。そう云う所に優越を彼は示そうとして居る。又一つは竜岡が全然異う仕事をしている所からも、その余裕を持てるらしかつた。竜岡は其年工科大學を出て發動機の研究の爲め近く仏蘭西へ行くつもりで居る。

「他人の氣持を見透したような書き振りが一番不愉快だと云つてやつたんだよ。たまには当る事もあるが、人間の氣持は直ぐ動いて居るから、次の瞬間にはもうそれを反省しているし、或る場合、同時に反対した二つの氣持

を持つて居る事もある。所が阪口の書く物では主人公に都合のいい氣持だけが見られて、不都合な方には全て色盲なんだ」

「もう解つたよ。何遍繰返したつて同じ事だ」阪口も一寸不快な顔をした。

「今朝から散々油をしばつて居るんだよ」竜岡は謙作の方を向いて多少神經的に笑つた。

「しつこい奴だ」と阪口が独語のように云つた。

「ええ？」竜岡もむつとして云つた。「この位の事を云われて君に腹を立つ資格はないよ。腹を立つなら、もつと幾らでも云うよ。君は一トかど悪者がつて居るが、悪者としてちつともなつてないじゃないか。書いたものでは相当悪者らしいが、要するに安っぽい偽悪者だ。——墮胎が何だい」竜岡はつっぱなすように云つた。彼は今まで快活らしくはしていたが、其実阪口のにやにやした態度に不愉快を感じていたらしなかつた。そして、それを破裂させた。竜岡は小柄な阪口に較べては倍もあるような大男で、その上柔道が三段であつた。そう云う点からも阪口はすっかり圧倒されて了つた。

謙作は先刻から阪口に対する自分の態度を如何決めていいかわからないで居る内に竜岡がこんな風にやつて了つたので、その白けた一座をどうしていいかわからなかつた。其儘三

人は黙って居た。

「船は決ったのかい？」少時して謙作が沈黙を破った。

「十一月十二日の船にした」

「支度はもう出来たのかい」

「別に大した支度もないからネ。——それはそうと、浮世絵を少し買つて行きたいと思うんだが、何時か一緒に見に行つて貰えないかな。どうせそう高い物は買えないが、彼方で世話になる人の贈物にしようと思うんだ」

「此方もよくは解らないが、何時でもいい。行こう。然し此頃は随分高くなつたらしいよ。前の相場を知つて居ると買う気がしないそう。若しかすると巴里で買う方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつは困るな。何か別の物にするかな」
「榛原の千代紙でも持つて行つちゃ、どうだい。生じつかな浮世絵より子供のある家なんかは喜ぶだろう」

謙作は阪口の氣押されたような様子を見ると氣の毒な氣もしたが、あの作中の友達が竜岡の云うように竜岡をモデルにしたものとは思えなかつた。成程書かれた場面は大概自分の知らぬ場面であつた。けれども其性格は阪口の眼に映つた自分をモデルにして居るとしか思われなかつた。實際阪口が竜岡にそう云うかどうかは分らないが、「場面は成程君と

の場面を借りた。然し性格がまるで異うじゃないか」こんなことを云いそうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口の猾いやり方だと思つた。若し自分が性格だけは僕をモデルにしたに違ひないと掛合つて行けば、それは同時に自身の性格を其作中の下らない人物のそれに近いものと認めることになる。寧ろ書かれた場面が實際自分との間にあつた事ならば却つて怒りいい。然し性格だけを自分に取つたろうとは云いにくかつた。それ程に下らない人物に書いている。竜岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰が思うものかと云い、自分が怒れば、君はああ云う性格の人間と自分で思つて居るのだねと云い兼ねない。此処に阪口の変な得意がありそうに思うと謙作は尚腹が立つた。今の謙作は阪口に対しては極端に邪推深くなつていた。前に彼を信じて居ただけに、それを裏切られた今は、事々にこう云う邪推が浮ぶのであつた。殊に愛子との事以来、それは甚だ面白くない傾向だと知りつても、彼は妙に他人が信じられなくなつた。今も前夜からの阪口に対する氣持を考えて、竜岡が彼自身だけがモデルにされたように怒つて居るのを見てさえ或疑いを持つのであつた。

竜岡には昔氣質がある。若しかしたら作中の友達が同時に謙作をもモデルにして書かれ

である事を承知の上で、故意と自身だけがモデルかのように云つて、阪口をやつつけたのではあるまいかと、謙作は思つた。竜岡はそうする事で一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも氣まずくなくして日本を去りたいと思つて居るのではあるまいか。それでなければ阪口をわざわざ連出して来て、自分の前でこれ程にやつつけることが普段の彼の氣質としては少し不自然に考えられた。竜岡には短氣な性質もあつた。然し自分だけの問題に第三者のいる前であれ程に露骨に云う彼とも思えなかつた。謙作には其処に何か彼の昔氣質から出た思惑がありそうにも思われた。

二

新開地のような泥濘路に下品な強い光がさして居る。両側の家々からは鮮やかな、然し神経を疲らしている者は、その為め吐氣を催すかも知れない程、あくどい色の着物を着た女達が往來を通る男に呼びかけて居る。それは憐憫を乞うようにも、罵るようにも聴きなされる叫声であつた。

竜岡と謙作とはもうすっかり圧倒されて了つた。二人は並んで往來の中程を真直ぐに急ぎ足で歩いて居たが、それでも竜岡は小声で、

「中々綺麗な女が居るネ」などと云った。

其日三人が赤坂福吉町の謙作の家を出たのは四時頃だった。気不味い感情を脱け出せずにいる阪口は直ぐ二人と別れたが、竜岡は却々彼を離そうとしなかった。竜岡には此儘別れて了うのは如何にも寢覚が悪いしかった。彼は自身が余りに云い過ぎた事を多少悔いてもいる風だった。そして三人は竜岡の千代紙を買うつきあいをして日本橋の方へ行ったのである。

木原店の或料理屋で食事をした。謙作は殆ど飲めない方だったが、其処を出た時には他の二人は可成りに酔っていた。

竜岡が突然、これから吉原見物に行きたいと云い出した。西洋へ行く前に見た事のない吉原を一度見て行きたいと云うのだ。

「謙作、いいだろう？ 只見物だけだ」彼は気兼ねをしながら謙作を顧みた。謙作も未だそう云う場所を知らなかった。彼は不愛想に生返事をしたものの、心では可成り拘泥した。そう云う場所には決して足を踏入れまいと云う程の気はなかった。何方かと云えば多少の興味もあった。それ故、今竜岡にそれを云われると冷淡を粧いながら、妙にドキリとした。

——謙作と竜岡は電信柱の多い仲の町まで出て、其処で遅れた阪口の来るのを待つて居

た。阪口は如何にも酔漢らしい様子をしながら、格子とすれすれに、時々何か女に串戯口をききながら歩いて居た。

「オイ、早く来ないか」と竜岡が声をかけた。「空模様が少し変になつて来た」

阪口は聴えない振りをして矢張りぶらぶらと歩いて居る。謙作は空を仰いで見た。黒い雲が建並んだ大きな建物の上に重苦しく被いかぶさつて居た。

「俺達はどう帰るよ。一緒に帰るかい？ それとも別れるかい？」と竜岡が云った。阪口は何か愚図愚図云つて居た。そして三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。

ポツリポツリ雨が落ちて来た。三人は可成り疲れて居た。結局其辺の茶屋で少し休んで行く事にした。筆太に色々な屋号を書いた行灯を出した同じような家が両側に軒を並べて居る。三人はいい加減に西縁と書いた、其一軒に入った。

眉毛の薄い、瘦せた四十余の女将が、寒むそうに両袖を胸の上で畳み合せ、店先に立つて、雨の降出した往来を眺めて居たが、

「どうぞ」と云つて、未だ二スの香の高い洋風の段々から彼等を表二階の座敷へ導いた。新築の白っぽい木地には白熱瓦斯のケバケバしい強い光りが照り反して居た。そしてそれとは凡そ不調和に、文晁とした、汚れ切った

横物の山水が浅い置床に掛けてあった。二スの香の高い洋風の段々と云い、此不調和な生々しい座敷の様子と云い、芝居の仲の町とは大分趣の異つたものだと言作は思った。彼は多少落ちつかない気持で、柱に背を寄せかけて、ジーンと音でもして居そうな疲れ切った膝から下を立膝にし、抱えて居た。

女将と入れ代つて眼の細い体の大きな、象のような印象を与える女中が茶道道具を持って入つて来た。

「小稲と云う人は居るかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ、もう晩うゝんすから、有ればようゝいます。お馴染なんですか」

「いいえ」阪口は済まして答えた。

人のよきそうな女中はそれを真に受けていいものか、どうかを迷うらしかった。そして、

「一寸見て参りましょう」と降りて行つた。

謙作も竜岡も何かしらぎこちない気持ちに捉えられて居た。竜岡はそれを払いのけるように鮎台の上の煙草盆から紙巻へ火を移すと、勢よく立ち上つて、障子を開け、一人縁へ出て行つた。彼が、がたがた云わして其処の硝子戸を開けると、同時に雨の音、泥濘を急ぐ足音などが聴えて来た。

「いい恰好をして駆けて行く」彼は通を見下